いずみさの昔と今 第344回

～「富嶽三十六景」の中に見る北斎の試み～

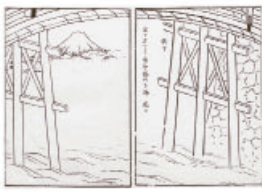
葛飾北斎は、前回にもお話ししたように当初は勝川春章の門人として、絵師の活動をスタートします。寛政6（1794）年、彼が35歳の時に一つの変化が訪れます。この時、勝川派を離れて独自の道を歩んだとされており、一説には破門されたのではないかと考えられています。

「富嶽三十六景」は浮世絵としては日本ではじめての大判の風景版画と言われています。では、北斎は個人の独創性のみでこの「富嶽三十六景」を完成させたのでしょうか。実は、かつて出版されていた本の図を参考にしたものも存在します。その中でも特に注目される本が「百富士」です。この本は江戸時代中期の俳人、画家の河村岷雪（？～1777）が出版しました。本には彼が各地で写生した富士図が、全4巻に101図掲載されています。図には狂歌・川柳・和歌などが添えられています。現在では、人の作品を真似すると盗作では？と思われますが、この時代にはごく一般的に行われていました。ただし北斎はそれを基にさらに良い作品作りを行っています。

また代表作「凱風快晴」の早朝の夏富士の赤い表現は、紀州藩の絵師、野呂介石（1747～1828）が描いた作品を参考にしたと考えられています。この当時の絵師は北斎も含め、作画へのインスピレーションをその当時の世相、先人の著述・作品から受容します。それらに絵師自身の創意を加え新たな作品を生み出すことになります。

また北斎は、絵の材料についても新たな試みを行っています。「富嶽三十六景」は非常に好評で、後に10図追加され全部で46図が制作されていますが、最初の36図の作品群は「表富士」、後の10図の作品群は「裏富士」と呼ばれています。その「表富士」については、主版（輪郭線を摺るための版木）で藍色を使用しています。また藍色の使用は染料の本藍の他に、ベロ藍と呼ばれる人工の群青色の顔料も使用しています。この頃からベロ藍は中国から安く輸入ができ、使用が可能になりました。また「富嶽三十六景」の中には植物から採った本藍そしてベロ藍を使って藍一色で制作したものもあります。

「富嶽三十六景」の発刊開始は天保2（1831）年頃で、この時、北斎は72歳になります。当時としては高齢ですが、「富嶽三十六景」を見ていると、あらゆる絵画技法を習得した技量があることはもちろんですが、それ以上にこの年齢ながら、作画に対する彼の並々ならぬ意気込みも図の中から感じられ、現在の世界的評価につながったと思われます。



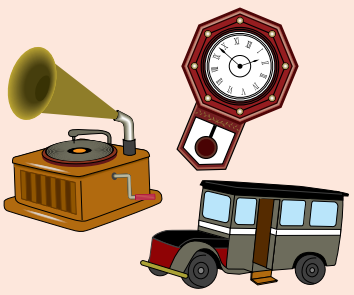
▲河村岷雪「百富士」より「橋下」

▲「深川万年橋下」（大阪浮世絵美術館所蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141

休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

泉佐野レトロタイムスリップ

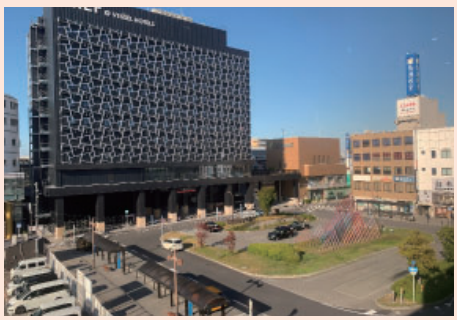


泉佐野市の昭和頃の懐かしい写真を紹介します。

②泉佐野駅上側（1）

▲昭和40年3月、和歌山方面からの空撮。右側の大きな建物は、当時建設されたばかりの市民会館（今はありません）。

▼昭和40年ごろ、左の写真の市民会館側から見た駅上のロータリー。泉佐野駅 地下道完成の式典と思われます。



▲最近の泉佐野駅上側。高層ホテルが建設され、かなり昔と雰囲気が変わっています。

泉佐野市の懐かしい写真は「泉佐野市デジタルアーカイブ（https://adeac.jp/izumisano-city/top/）」でも公開中!